

痛恨の満州

山門郡大和町 玉田 甚夫

あれから50年、8月の声を聞くたび私の脳裏にはあの頃の様々な記憶が走馬灯のように蘇ってくる。

昭和20年、私達の部隊は関東軍直轄として、旧満州（現中国東北部）と旧ソ連との国境近くに配備されていた。山の向うはソ連領、そこには強大な火力と機動力を備えたソ連極東軍が展開していた。が、その実態についての情報は乏しく、私達には、機械化された精強な軍団、といった漠然とした認識しかなく、万一日ソ交戦ともなれば、貧弱な装備の我軍の状況から、圧倒的な彼らの火網の中を生き延びることはまず不可能、という意識が潜在していた。

8月9日未明、突如、国境を越えたソ連軍は雪崩のように満州領内に進入してきた。早朝の非常呼集で、私達の部隊には「現地死守」が厳命された旨が伝えられた。塹壕の構築、弾薬受領等で隊内は俄に慌しくなってきた。

未知の敵に対するという興奮と、生への執着を紛らすためか、戦友達の中には軽口などたたく者もいたが、現役3年、兵の中核として最も充実した年次である筈の私も、初陣への悲壮感とは皆と同じで、23年の短かった命もこの異国の野に果てるかと思うと、父の他界後苦勞を重ねてきた家郷の母や、まだ幼い弟妹達の顔が頭の中を去来し、いい知れぬ望郷の思いに駆られたことだった。

ドロドロと聞こえる遠雷のような音は、前方に孤立した味方の監視哨陣地がソ連軍の砲撃を浴びているのだろうか。

昼頃だった。どこからか飛来した友軍の偵察機が1機、兵舎上空を旋回して去ったが、これが終戦まで私達の見ただけの唯一の友軍機であった。「作業中止、全員集合」が告げられたのはそのすぐあとである。壇上に立った部隊長の訓示は、「作戦上の都合により関東軍は国境線を撤収、後方拠点へ転進する。我部隊は林口陣地へ急行、行動は中隊単位、諸子の武運を祈る」という内容だった。

兵力温存が目的だったのだろうが、この国境線よりの早期撤退が結果的に敵地に残された多くの邦人に地獄の苦しみを味わせることとなり、「同胞を見殺しにして軍人だけが先に逃げた」とした後日の関東軍への非難の原因となったのである。

現金なもので、当面玉砕を免れたという安堵からか、兵達の間には笑い声さえ聞かれるようになった。

林口は後方100kmに位置する。

小雨の中、夕刻から起こされた強行軍が一夜明けたとき、内陸部へ通ずる泥濘の道路は夥しい人馬に溢れていた。続々と退却してくる各種部隊や民間人、あるいは戦禍を避ける現地中国人などが入り混り、大混雑となっていた。

警笛を鳴らし泥水を刎ね上げながら退く軍用車、リュックを背に乳呑児を抱き、なお片手に幼い子供の手を引き摺るようにして行く婦人、杖に縋り、遅れまいと懸命に歩く老女、泣き叫ぶ子供達。更には『背後にソ連戦車迫る』との情報が混乱に輪をかけた。パニック状態になった人々は、転げるように草むらや溝の中へ逃げ込んだ。

私達は、ソ連戦車に対しては、もはや効力はないとされた旧式の速射砲を道路脇に据え、応戦の態勢に入った。

結局、戦車は現われなかったが、本隊との連絡も絶え、無線機さえ持たぬ私達の隊は、独自の判断から、敵機などによる損害が予想される本道を避け、山中の間道を分けて目的地林口を目指すこととなった。現地人さえ滅多に通らぬこの道も、先行した人達に踏みつけられ、ところどころに破れた衣類や靴、缶詰の空缶などが捨てられていた……。

開戦以来もう3日、疲労も重なって隊列は延びきり、道案内という現地人もいつしか逃げて、地図にもないこの山道も次第に険しさを増してきた。連日の行軍と戦闘に行方不明者等も増え、中隊の人員も今は半数あまりとなっていた。この頃から道端には内陸部へ逃れる一般邦人や、落伍した他隊の兵などが疲れ果てて草の上に腰を落している姿が見られるようになった。

秋の訪れの早い満州でも、日中の暑さはまだ厳しく、肩に喰い入る装具の重さに喘ぎながら歩いていた私は、ふと気付くと、開拓団の家族と思われる中年の婦人が一人、少し入った草むらに坐り、側に積んだ枯草を燻しているのが見えた。何気なく通過しようとして私は一瞬、息をのんだ。枯草の下から小さな四本の足が突き出ていたのである。私はこの状況が咄嗟に理解できず、近寄って「どうしたのか」と尋ねた。婦人は「もう歩けない。殺して焼いている」という言葉をかえしてきた。戦火に追われ、辺境の入植地よりやっどこまで辿りついたものの、身心共に疲れ果て、足手まといになる二人の子供を殺して焼いている、ということである。泥に汚れた衣服、乱れた髪、蒼白い顔はもう思考力さえ失せていたのかもしれない。チロチロと枯草を燃やす程度では焼ける筈もないわが子の姿を、じっと凝視めているその横顔に、私は次の言葉が出なかった。逃げるようにその場を去ったが、無愛想なまでの婦人の態度に、邦人保護の任務を果し得なかった軍への不信と怨念を見た思いがした。……

やがて道も途切れ、林口の方向さえ判らず、私達は次第に老爺嶺山中深く踏み込んで行くのに気付いた。反転はもはや不可能。巨木の間を洩れる日光を頼りに、方角を見定めるため山頂へ向って重い足を引き摺って行った。倒木を越え岩角を伝い、どれくらい歩いただろうか、やっど頂上に辿りついた私達の一縷の望みは忽ち落胆に変った。見渡す限りの大樹海である。目標物もなく方位の設定どころではない。

思案する私達の前に、ガサガサと草を分ける音がして、一人の白髪の老人が出てきた。突然のことに驚いてその方へ目を移すと、婦女子のみ7、8名の邦人が蹲まっているのが見えた。老人は「私達はT開拓団の者だがここに迷い込んでしまった。疲労で皆、動けない、助けてくれ」と訴えてきた。隊長は即座に「自分達は任務を負って転進中である。気の毒だが手を貸すことはできない。随いてくるのはかまわないが行動の妨げとなってもらっては困る。また、生

命の保証もできない」と答えた。ヨロヨロと立ち上った彼等は、反対側の谷に下ることになった私達の後尾に、しばらく従っていたようだったが、その姿もいつの間にか見えなくなってしまった。千古の密林にとり残された人達のその後の運命は知る由もない。私は、その老人が身につけていた白い手甲脚絆が今でも脛に焼きついている。……

敗戦を機に、一転して難民となった在満州邦人達にまつわる悲劇の事例は数知れない。

これは私が見たその中の一、二の例であるが、ソ連参戦により狼狽した関東軍首脳部の状況判断や、作戦指導の誤りが、17万余ともいわれる邦人犠牲者や、今なお尾を引く残留孤児の問題などを生じたことを思うと、末端の兵ながら当時関東軍の一員だった者として自責と痛恨に堪えないところである。